

剣の道

イーシャ・サーデサイによる再話

剣は空を切って素早く動き、旋回しました。それらの剣を振るう男たちは、正確に動き、足さばきは素早く、足を一步動かすごとに彼らの衣がくると翻っていました。遠方で、彼らが稽古をしている道場を見下ろしているのは、富士山でした。その堂々とした白い頂は、麓の村々の、すべての営みに立ち会ってきました。

二十歳ばかりの青年、シロハは、剣士たちを驚嘆して眺めていました。彼は以前からずっと、この武道を学びたかったのです。しかし、彼の家は、彼を稽古に出してやれないくらい貧しかったのです。彼はどれほどに、これらの男たちに混じって、彼らがそうであるように、剣の言語に通じるようになりたいと切望していたことでしょうか。

この独特な形態の剣術は「剣道」と呼ばれ、日本では崇敬されてきました。戦うこと以上に、その目的は、入門者の人格を高めること、すなわち、規律、名誉、己の高潔さなどの価値を身に付けさせることでした。実際に、剣士たちが動く所作には——戦いにおいても、かつまた、世の中においても——彼らを取り巻いている空気の粒子を変えるようにも思われるものがありました。シロハはいつも、彼らの前では背筋をより真っすぐにして立つのでした。彼の身体、彼の存在そのものが、敬意を持って反応せずにはいられなかったのです。

その日、数組の生徒たちが打ち合いの稽古をしていました。彼らはすでに何時間も打ち合い稽古をしていて、彼等の剣は日光を浴びると明るく銀色に輝いていました。ついに、先生が道場の入り口に闊歩(かつぽ)してきました。彼はかなり高齢で、強健な顎と白髪交じりの髪をしていました。

「剣を下ろしてよろしい」と、先生が言いました。「今日はここまでだ」

生徒たちが持ち物をまとめていると、シロハがこの男に駆け寄りました。

「どうか、先生、あなたから剣の道を学びたく存じます」と、シロハは言いました。

先生は彼を注意深く見詰めました。「おまえがか？」と、彼は言いました。

「はい」と、シロハは答えました。「私には稽古のためのお金はありませんが、もし、あなたが私を生徒として受け入れてくださるなら、私は本当に一生懸命に勤めます。きっと、お分かりになるでしょう」

「ああ、そうかね？」と、先生は片方の眉をつり上げて尋ねました。「一体どのくらい一生懸命勤める準備ができているのかね？」

「私は明日から、あなたのご指導を受けに毎日欠かさず参ります」

「それは良い出だしだ」と、先生は言いました。「もしも、そのくらいに稽古をするのであれば、20年もたてば、おまえはほどほどに熟練した剣士にはなっているだろう」

シロハはこれに面食らいました。20年も学ばなければならないのでしょうか？　ただほどほどに熟練するのに？

彼はすぐさま間違いに気づきました。「私はもっと稽古します！」と、彼は言いました。「ご指導の前と後にも稽古します。朝から晩まで私は稽古します」

先生は顎をなでました。

「もしそうなら、おまえは 30 年か 40 年後に刀を使えるようになるだろう」

シロハは理解できませんでした。今度は 40 年かかる？

「私は夜通し稽古します！」と、彼は言いました。

「50 年」と、先生は言いました。

「食事を抜きます。他の事はすべてやめます。私は剣道に、剣道だけに集中します！」

「ああ」と、先生は言いました。「もしおまえがそうするなら、おまえの人生が終わる時までには物になる見込みがあるかもしれない。もちろん、保証はないが。生徒の身分を終えるのに、来世でもあと数年は確保する必要があるかもしれない」

シロハは言葉を失いました。

「お願いします」。ついに彼は言いました。「剣の道を学ぶために、私ができることを教えてください。先生がおっしゃることは、何でもやります。それがどれほど長くかかろうと、努力をします」

先生はほほ笑みました。「よろしい」と、彼は言いました。「明日戻って来なさい。そこから始めよう」

そこで翌朝、日の出直後に、シロハは戻って来ました。彼はこのために真新しい衣を一そろい身に着けていました。「今日はどんな動きを学ぶのだろう？」彼は熱心に思い巡らしました。「どんな足さばきや太刀さばきだろう？」

道場に向かっていた時、彼は間の抜けた笑みを浮かべてまだこの思いにふけていました。ところがより近づいた時、彼は気づいたのです——誰もいません！

シロハは困惑して周りを見回しました。「先生？」と、彼は大声で呼びました。「いらっしゃいますか？」

先生は道場の隣の小さな家に住んでいました。シロハが先生を大声で呼ぶと、この家の中から物音が聞こえました。少しして、先生の付き人の一人が、ほうきとぬれ雑巾を持って大股で出てきました。

「シロハか？」と、付き人が言いました。「ほら」。付き人はほうきと雑巾をシロハの手に押し付けました。「先生がおまえにこれを渡すようにとおっしゃった」

シロハは当惑し、その用具に目を落としました。「私はこれで何をすればいいのですか？」と、彼は言いました。

「何を言っているのだ？」と、付き人は答えました。「道場を拭き上げるということではないか」

「しかし——何かの間違いに違いありません。私は掃除をするためにここに来たのではありません。剣道を習いに来たのです！」

「先生はそのような間違いをなさらない」と、付き人は言いました。「さあ、私がおまえなら、さっさと掃除をするぞ。もうすぐ人々が稽古に来る」

シロハは付き人が去るのをじっと見詰めました。ほうきと雑巾を手にならりと下げたまま。やがて彼は、少しほこりがたまった床に視線を落としました。深呼吸をすると、仕事を始めました。

彼は浮かぬ顔で、ゆっくりと力なくほうきを動かしながら、1時間近く掃除をしました。すると、突然——バシッ！

「何するんだ！」と、彼は叫びました。

くると振り返って見ると、そこには先生が穏やかに笑ってこちらを見ていました。

「先生！」と、シロハは驚いて言いました。先生の手には細い木刀が握られていました。「せ、先生が、今私をたたいたのですか？」

「ああ、そうだ、私がやったのだ」と、先生は言いました。

「でも——なぜですか？」と、シロハは尋ねました。「私はあなたの指示通りに道場を掃除しています」

「ああ、そうだ」と、先生が言いました。「しかし、それは構えをするなという意味ではない」

またしても、シロハは言葉を失いました。

「まあ、そのように私を見詰めていないで、仕事に戻りなさい」と、先生は言いました。

そうしてシロハは掃除を続けました。彼が掃除を終えると、先生は、台所に行ってその日の昼食の支度をするように言いました。シロハが昼食を作った後には、先生の住まいの周りの庭を手入れするよう言いつけました。

時々、しかもシロハが全く予想しない時にいつでも——バシッ！ 先生が木刀を持って背後から忍び寄るのです。それは、その日が終わるまでに何度も何度も起こり、シロハはひどく困惑し、少なからず緊張していました。

「で、シロハ…」と、先生は夕方になったので帰る支度をしているシロハに言いました。「おまえは明日も来るのか？」

シロハはためらいました。

「はい、先生」と、彼は小声で言いました。

何カ月もの間、シロハはあらゆる雑務をこなし、先生のために働きました。この間彼は、一度も剣道の稽古をつけてもらえず、一度も剣を使わせてもらえませんでした。折を見つけては、先生に稽古のことを繰り返し持ち掛けました。「お願いします、先生」と、彼は恐る恐る言ったものです。「今日は戦う方法を教えていただけますか？」

そのたびに、先生は言いました。「忍耐だ、シロハ。おまえは今、自分に必要なことを学んでいるのだ」

その間も、先生は木刀を持って不意に姿を現し続けました。シロハが野菜を切っている時に——バシッ。床を拭いている時に——バシッ。シロハが庭木を刈り込んでいる時に——バシッ、バシッ、バシッ。

しかし時がたつにつれ、奇妙なことが起こりました。シロハは目の前の仕事に完全に集中するようになり、彼の注意は目下の仕事は何であれ、それに没頭するようになりました。半面、彼の身体は聞き耳を立て始めました。彼の意識は拡大したようになり、新たな特性を得ました——あるいは、この特性を彼はずっと持っていて、今それを見いだしたただけなのかもしれません。彼は木刀が彼に届く前にも、風に乗るそのヒュッというかすかな音を聞くことができました。そして本能的にすべきことが分かりました。どこへ動くべきか分かるのです。それはまるで舞のようになりました。木刀が真っすぐ突いてくれば、彼は横に滑らかに動きました。木刀が飛ぶように向かってくれば、彼の腕がすりと上がってそれを阻止しました。

ある日、シロハは庭に出ていました。そこは素晴らしい所でした——木々の葉は燃えるように真っ赤で、富士山の頂は日光の中で輝いていました。

ヒューッ。

シロハはその音を知っていました。そして耳がそれを捉えると、他のすべては静まりました。すべてが遅くなり、時の流れは弾性を帯びました。空気が彼の肺を通り、彼の胸が持ち上がって下がるのを感じました——そして一つの流れるような動きで、彼は横にくると回りました。彼は先生の伸びている腕をつかみ、先生の手から剣の柄(つか)を滑り落とさせ、それを自分の手でしっかり握りました。

「おお！」と、シロハは言いました。時の流れは普段通りに戻り、彼は初めてその剣をしっかりと見ました。彼は手の中で、その重さを感じました。「先生、これは真剣ではないですか」

「そうだ」と、先生は言いました。

「先生、私には訳が分かりません」と、シロハは言いました。

「シロハ、おまえをととても誇りに思う」と、先生は答えました。「おまえが剣道をどれほど理解するようになったことか、見てみなさい」

「どういうことですか？」と、シロハは尋ねました。「私はまだ全く稽古を始めていません」

「シロハ、ずっと私の木刀の呼び掛けに反応していた時、おまえは何をしていたのだと思うか？」

シロハは一瞬考えました。

「私は…自然に出て来たことをただやっていただけだと思います」

シロハが見上げると、先生が彼に笑い掛けていました。

「そうだ」と、先生は言いました。「そうだ、その通り。おまえは自然に出て来たことをやった。これから、私の指導を受けることを許す」

